



Title	衛生学講座開設過程と初代教授・毛利高一先生のこと
Author(s)	神山, 昭男
Citation	北大医学部衛生学教室同窓会誌 : 齋藤和雄教授退官記念号, 42-51
Issue Date	1998
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86368
Type	journal article
File Information	eisei_1998_p42.pdf



衛生学講座開設過程と初代教授・毛利高一先生のこと

神 山 昭 男

はじめに

北大医学部五十年誌には衛生学講座開設の状況について次のように記載されている。

「北大医学部に衛生学講座が設置されたのは大正12年7月のことである。それは、医学部設置から4年後、授業開始から3ヵ月後であった。

当時、細菌学教授の中村豊が衛生学講座を兼担しており、東大医化学出身の毛利高一が細菌学の助教授に招聘され、衛生学を研鑽するために文部省在外研究員としてドイツに留学し、帰国後衛生学講座専任教授となることが予定されていた。毛利が2年間の留学を終えて衛生学講座の初代教授に就任したのは大正15年1月11日のことである。それまで衛生学の講義は中村教授が担当していたが、同時に横手千代之助（東大教授）、戸田正三（京大教授）、野辺地慶三（国立公衆衛生院）などが臨時講師として分担していた。

かくして、近代医学の中で新しい分野として登場した衛生学講座は毛利主任教授のもとに開講され、一期生の木村正一は卒業と同時に助手として教室に入り、研究に従事した。

しかしながら、将来を期待された毛利教授はその能力を発揮する暇もなく、昭和2年4月に病いを得、同年5月31日に休職となった。かくて創設間もない衛生学講座は振り出しに戻り、再び中村教授が兼担することとなった。」

平成4年1月、同窓会役員会で教室の沿革に関する論議が行なわれた。教室の沿革を知るためには、講座開設過程を物語る具体的な資料が必要であったが、上記の記述以外に適当な資料は手もとに見当たらなかった。

そこで、同窓会事務局では講座開設期の状況をさらに詳しく物語る資料、特に初代教授の毛利高一先生の素顔に触れる資料や教授就任前後の業績など、関連資料を収集する作業に着手した。

資料の収集

大正時代といえ、すでに相当な年月が経過しており、資料が散逸している可能性が大きい。早速、身近な北大の関連部署に保管されている古い書類をひもどく一方、衛生学雑誌の編集委員会に出張した機会を利用して東大医学部附属図書館で資料の検索を行なった。

その結果、北大医学部事務部では毛筆で書かれた人事発令簿、出張記録、学位記等、北大附属図書館本館では学位論文の主論文と参考論文、北大医学部附属図書館では医事新報掲載の医籍簿、北海道医学雑誌掲載の論文等、東大医学部附属図書館では、医化学教室出身者及在室者名簿、東大衛生学教室の沿革を記した記念誌等、貴重な一次、二次資料を得た。なお、東大医学部附属図書館には卒業期毎に卒業記念写真アルバムが保管されていたが、残念ながら、毛利先生の属した大正7年7月卒業の写真アルバムだけは欠落していた。

そこで、四国の松山市で開催された日本衛生学会総会参加後、同僚の齋藤健先生と共に毛利先生の生まれ故郷である山口県豊北町で聞き取り調査などを行なった。そして、毛利先生の晩年の様子について若干の情報を得ることができた。

講座開設期の歩み

収集した一次資料等から講座開設前後の歩みと毛利先生の足跡をまとめると表1のごとくである。

大正11年春3月に衛生学講義および実習を組み込んだ教育カリキュラムが正式に決まり、4月には第一期生が入学し授業がスタート。そして同年秋10月には毛利先生、当時は改姓中島（なかしま・たかいち）先生が助教授として就任、次いで11月には教室の建物が落成。この年の後半から着々と教室づくりが開始されていた様子うかがえる。

翌12年には一足先に東大から北大に赴任した細菌学教室の中村教授、千葉医学専門学校から派遣されていた同水野薫講師らの指導によって研究活動が開始され、中島先生らは「衛生細菌学教室所属、主任中村教授」として、腐敗細菌に関する研究を北海道医学会に発表した。

中島先生がドイツ留学中の13年7月、ついに講座増設の勅令が下り、職員名簿に「衛生学教室」として、「兼担 教授 医学博士医学士 中村豊、(在外研

表 1 衛生学講座開設の歩みと毛利高一教授の足跡

講座等の動き	西暦	年号	年	月	日	毛利高一教授の足跡 (満年齢)
	1891	明治	24	6	7	山口県豊北町神田上 195 にて、父毛利兵輔氏、母ヨシコ氏の三男として出生 (0)
	1915	大正	4	12	27	中島保子氏と結婚後、中島高一と改姓 (24)
	1918		7	7		東京帝国大学医学部卒業 (27)
勅令第 12 号を以て帝国大学令改正となる。同日 勅令第 13 号を以て本学に医学部が設置される	1919		8	2	6	
				9	11	東京帝国大学大学院入学 (医化学教室) (28)
	1921		10	9	11	同退学。陸軍省、補陸軍戸山学校附兼同校教官となる (30)
医学部学則、規程制定。4 月 1 日より授業開始。 授業予定では衛生学、同実習は 4 年目 4 月から翌年 3 月まで 医学部学生第 1 回生 67 名の入学許可 勅令第 265 号を以て細菌学講座等が増設される 中村豊先生が細菌学講座担任を命ぜられる	1922		11	3	17	
					4	
					5	
					6	
				10	7	北海道帝国大学助教授就任。医学部勤務を命ぜられる (31)
病理学、細菌学、衛生学教室が落成する				10	10	
	1923		12	5	23	衛生学研究のため、2 年間英独等へ留学を命ぜられる (31)
				7	25	参考論文が独学術誌に受理される (33) *文献 1
				10	10	札幌出発 (32)
				10	15	(北海道医学会第 4 回例会にて共同研究 2 題が発表される) (32)
				10	18	神戸解纜 (32)
	1924		13	4		北海道医学雑誌第 1 年第 3 号及び第 4 号に共著 2 編掲載される (所属は衛生細菌学教室) (32) *文献 2、3
				4	18	
金子吉文先生が衛生学講座助手を命ぜられる 勅令第 163 号を以て衛生学、精神病学、内科学 第三の各講座が増設される 中村豊先生が衛生学講座兼任を命ぜられる				7	7	
				7	8	
	1925		14	5		主論文が独学術誌に受理される (33) *文献 4
第 3 回北海道医学大会で金子吉文、伊藤定隆先生による研究発表 (所属は衛生細菌学教室)				6		
				12	11	帰朝 (34)
				12	18	帰学 (34)
	中村豊先生が衛生学講座兼任を免ぜられる	1926	15	1	11	北海道帝国大学教授就任。医学部勤務、衛生学講座担任を命ぜられる (34)
						北海道医学会第 22 回例会にて「公衆衛生最近の進歩」発表 (34)
木村正一先生が衛生学助手を命ぜられる				3		
				4	9	中島保子氏と離婚 (34)
				4	15	
				4	20	北海道帝国大学より博士号 (第 12 号) 授与 (34)
				4	29	毛利高一に改姓 (34)
中村豊先生が衛生学講座兼任を命ぜられる				11	15	河野ヒサ氏と結婚 (35)
	1927	昭和	2	5	31	休職 (35)
	1928		3	4	17	北海道帝国大学退職 (36)
				11	7	河野ヒサ氏と離婚 (37)
	1929		4	7		
中村豊先生が衛生学講座兼任を免ぜられ、井上善十郎先生が北海道帝国大学教授に就任される						
	1929		4	7		
	1975	昭和	50	9	15	郷里の山口県にて死去 (84)、戒名釋利高僧士

注 表中の文献は図を参照

究中)助教授 医学士 中島高一、助手 医学士 森重静夫、助手 医学士 金子吉文」の氏名が掲載された。

中島先生は 2 年 2 ヶ月に及ぶ留学から帰朝してわずか 1 ヶ月後、内閣から任命されて初代教授に就任された。それから 3 ヶ月後、独語論文 1 篇 (図 1)、邦文論文 2 篇 (図 2、3) を参考論文として、留学の成果と思われる 7 ページの独語論文 (図 4) を主論文として提出し学位を取得された。

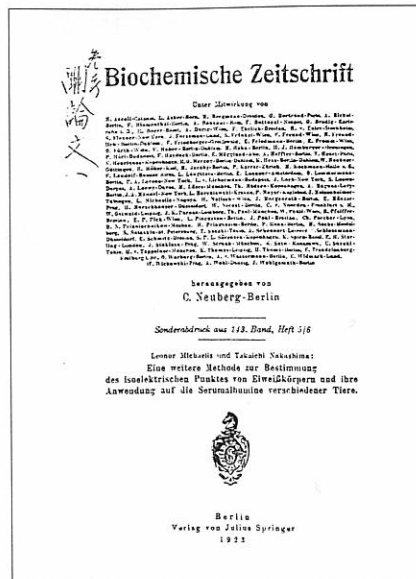
その後、まもなく再び改姓した毛利先生は 1 年後に突然休職、さらに 1 年後には退職という事態に至った。中村教授がしばらく兼任されたあと昭和 4 年 7 月に後任の教授として欧州留学から帰朝まもない井上善十郎先生が就任された。

毛利先生のその後

毛利先生は札幌に来られて 5 年半で北大生活を終えた。休職の理由は定かではないが、東大大学院医化学教室同門の北大小児科教授永井一夫先生は「目下病気入院中」との連絡を昭和 2 年 1 月同教室に寄せている。

毛利先生の生まれ故郷、山口県豊北町は日本海に面しているが一歩中に入ると水田が広がる半農半漁のまちで、東へ約 100 km 離れたところに萩市がある。毛利家にゆかりの深い照蓮寺のご家族によれば、毛利先生の生家は江戸時代まで萩市を中心に栄えた毛利一族の末裔であったが、明治時代に入り次々と新たな職を求めて離散を繰り返し、毛利先生が東大に進学された頃はもはやご両親を含むわずかの元士族が居住していただけだった。そして、毛利先生が遠い北海道に行かれ、紆余曲折を経て同町に戻られたところは身寄りもすでに不在で、戦後の昭和 28 年 5 月、当時 61 歳の毛利先生は同町立松濤園 (現在は神玉老人ホーム) に入所し以後そこで余生を過ごされた。入園時の健康診断書には、日高重孝医師のサインで「伝染性疾病なし。視力 近視、聴力 正、身体の障害 (一)、その他の疾病 (一)」とあった。

毛利先生の人柄について、同園の在籍簿には、「東大卒、ドイツ留学 2 年、博士号を受し北海道帝大教授。……育ちが上品にできている……」と書かれ、入所期間のほとんどを世話し晩年の毛利先生を知る元同園職員の宮田緑氏によれば、「一番の思い出は、毎朝 9 時になると食堂の隅のテーブルの前にきちんと座り、下関から取り寄せた英字新聞をじっとご覧になっておられたこと、そして、



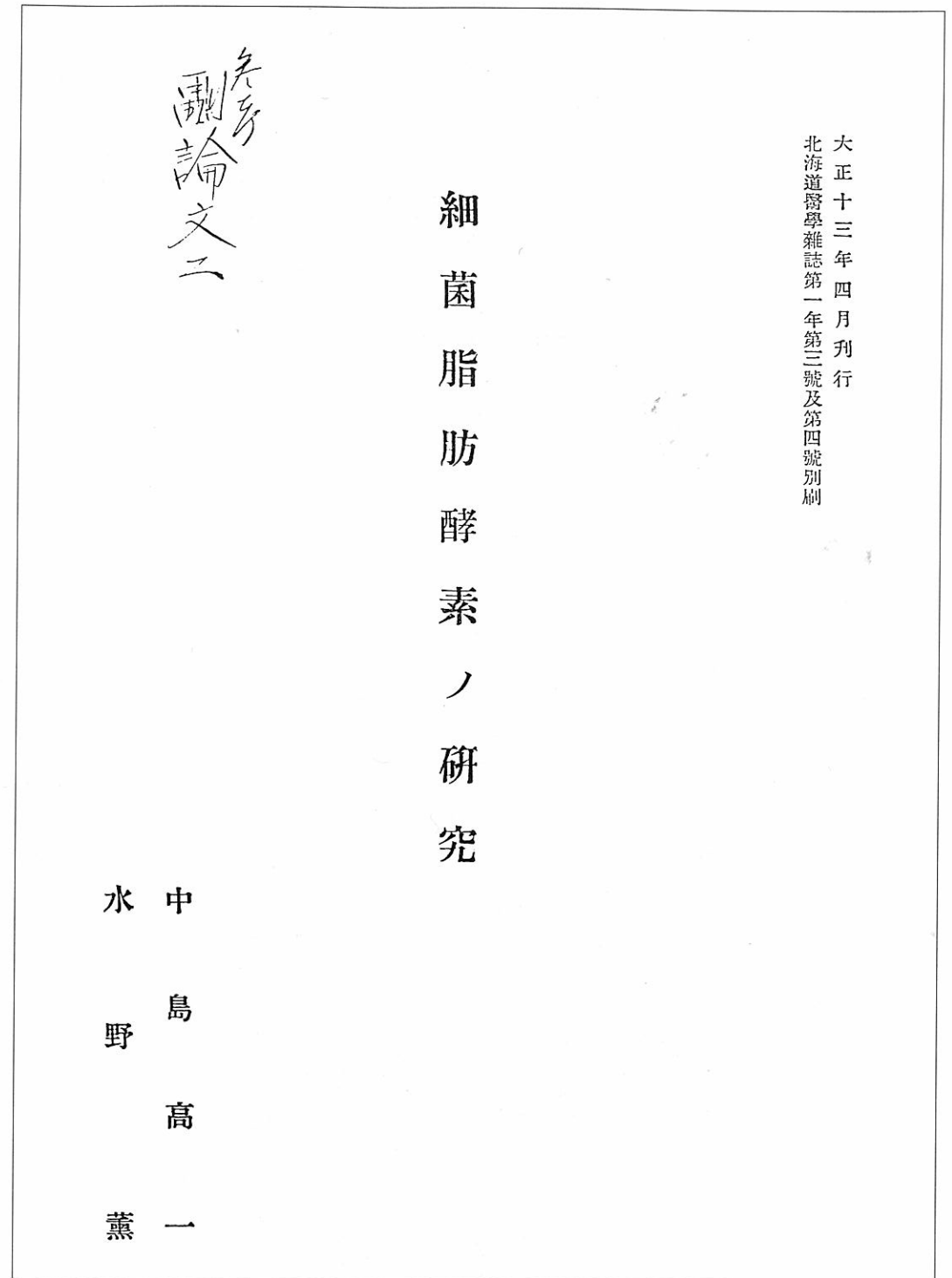
Eine weitere Methode
zur Bestimmung des isoelektrischen Punktes von Eiweißkörpern
und ihre Anwendung auf die Serumalbumine verschiedener Tiere.

Von
Leonor Michaelis und Takaichi Nakashima.
(Aus dem biochemischen Institut der Aichi-Medizinischen Universität
zu Nagoya, Japan.)
(Eingegangen am 25. Juli 1923.)

Wir können den heutigen Stand der Lehre vom isoelektrischen Punkte der Eiweißkörper etwa folgendermaßen zusammenfassen: Die elektrische Ladung der eiweißartigen Kolloide in wässriger Lösung hängt von der Konzentration und der Art aller in Lösung befindlichen Ionen ab. Unter den physiologisch in Betracht kommenden Ionenarten überwiegt der Einfluß der H^+ - und OH^- -Ionen über den der anderen Ionenarten so stark, daß es leicht gelingt, zahllose Kombinationen von verschiedenen Elektrolyten in verschiedenster Konzentration herzustellen, in welcher die Ladung des Eiweißes praktisch nur von den H^+ -Ionen beeinflusst wird. Infolgedessen ist es berechtigt, auch den isoelektrischen Punkt eines Eiweißkörpers auf eine Weise zu definieren, welche allein den Einfluß der H^+ -Ionen auf die Ladung berücksichtigt und den Einfluß anderer Ionenarten vernachlässigt. Diese Definition wird also lauten: der isoelektrische Punkt eines Eiweißkörpers ist diejenige H^+ -Ionenkonzentration, bei welcher das Eiweiß in einem elektrischen Potentialgefälle keine Bewegung zeigt, unter der Voraussetzung, daß die neben den H^+ - und OH^- -Ionen in Lösung befindlichen anderen Ionen von solcher Art und Konzentration sind, daß die Abhängigkeit der Ladung des Eiweißes von einer Variation der Konzentration aller dieser Ionenarten verschwindend klein ist gegenüber dem Einfluß der Variation der H^+ -Ionenkonzentration.

Die Erfahrung hat gezeigt, daß es außer der direkten Untersuchung der Bewegung der Eiweißteilchen in einem elektrischen Felde noch mehrere Methoden gibt, welche praktisch mit dieser direkten Methode übereinstimmende Resultate geben. Z. B. hat sich das Fällungsoptimum, das Viskositätsminimum, bei gelatinierenden Eiweißkörpern auch das Erstarrungsoptimum und manche andere Eigenschaften als

図1 文献1



細菌脂肪酵素ノ研究

水中島高一
野

図2 文献2

大正十三年四月刊行
北海道醫學雜誌第一年第三號及第四號別刷

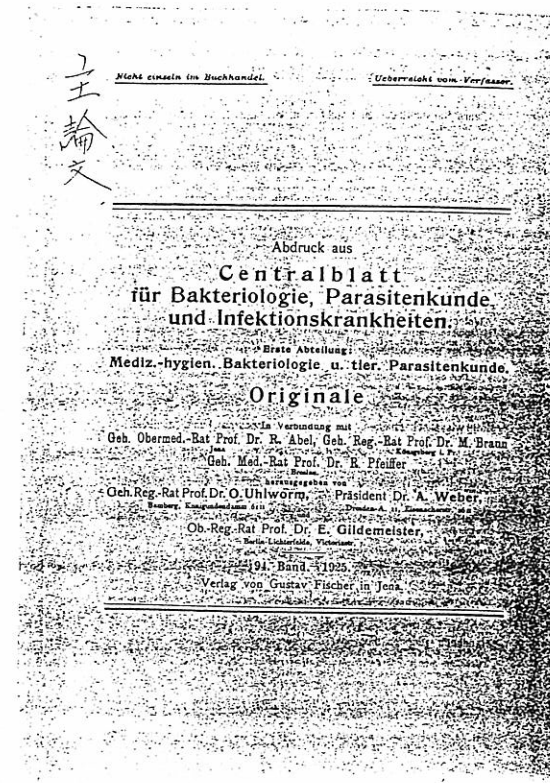
冬彦
副論文三

水素「イオン」濃度ニヨル培養基反應補正法

伊 中
藤 島
定 高
隆 一

大正十三年四月刊行
北海道醫學雜誌第一年第三號及第四號別刷

図3 文献3



Nachdruck verboten.
Beitrag zum Vorkommen und Verhalten des bakterio-
phagen Lysins in Abwässern.

[Aus der Abteilung V (Flußverunreinigung, Abwasserbeseitigung und Verwertung) des Hygienischen Staatsinstituts Hamburg (Direktor: Ge-
heimrat Prof. Dr. R. O. Neumann, Abteilungsvorsteher: Dr. O.
Kammann).]

Von Dr. T. Nakashima.

Schon lange vor der bedeutungsvollen Entdeckung d'Herelles war es bekannt, daß Flußwasser die Eigenschaft hatte, Bakterien, und zwar speziell pathogene Keime, zum Absterben und völligen Ver-
schwinden zu bringen. Ganz besonders auffällig nach dieser Richtung hin sind die Versuche, die der wissenschaftliche Leiter der Londoner
Wasserwerke, Houston, angestellt hat, indem er rohes Themsewasser durch einen einfachen Aufspeicherungsprozeß während mehrerer Tage
(storage tanks) so entkeimt fand, daß die weitere Behandlung für
Trinkwasserzwecke außerordentlich erleichtert wurde. Auch seine Ver-
suche mit pathogenen Keimen, Choleravibrionen und Typhusbakterien, die er den storage tanks künstlich zusetzte, verliefen analog, indem
in kürzester Frist eine starke Abnahme und schließlich ein gänzliches
Verschwinden dieser Keime festgestellt wurde. Auch an den Wässern
anderer Flüsse wurden ähnliche Beobachtungen gemacht, und spätere
Untersucher haben gezeigt, daß fast alle Oberflächengewässer, d. h.

図4 文献4

生活もきちんとしており、かといって頑なではなくてレクリエーションでは俳句と踊りに参加し、俳句は歌手の島倉千代子を自分の妻に喩えた句を詠むのが得意、踊りは覚えるのが早く踊りの先生に負けないくらい」で、皆に慕われながら晩年を迎えたとのことであった。そして、毛利先生が踊りに参加している1枚の写真をいただくことができた(写真1)。また、同町の開業医であった中島はじめ氏は同園の嘱託医であったこともあり、しばしば毛利先生と懇談されていたが、訪問2ヶ月前に他界され、お話を伺うことはできなかった。

なお、毛利先生は昭和50年9月15日、84歳の生涯を同園で静かに終えられた。照蓮寺住職がご遺体を引き取り、町内の無縁仏の墓地に埋葬された(写真2)。

おわりに

およそ3ヵ月の短い期間であったが、札幌、東京、山口の3地点で調査を手がけ、予想通り文書も写真もすでに存在しない事実を確認した場面も多かった。もう少し、早く着手していればより多くの関係者からお話を伺うことも可能だったに違いない。

だが、歴史の断片をひろい時間に沿って並べながら、大正時代に教室創設という大事業に携わった先輩たちのご苦労を偲び、想像以上に慌ただしい時代の動きに目をみはった。とりわけ、大正11年から細菌学の中村先生らとともに毛利先生が東京から駆けつけ教育に研究にと励む過程は、まさに教室のあけぼのといへる躍動的なダイナミズムを感じさせた。その点では、わずかではあるが

毛利高一先生



写真1 在りし日の毛利先生

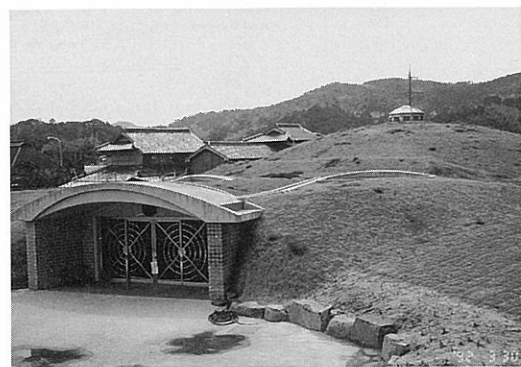


写真2 毛利先生が眠る無縁仏

今回の調査から教室の沿革をより明らかにする成果が得られたように思われる。

それにしても、休職から晩年までの毛利先生の足跡には半世紀にも及ぶ長い道のりがあった。大きな空白を埋めるいくつかのエピソードが得られたが、いずれも全体像に結びつく要素ではなかった。休職そして退職という急展開の背景には一体何があったのか。

北大時代までのバイタリテイ溢れる人間像と後年の緩やかで社交的な人間像とを比べると、そこにはひとつの人格を思い浮かべることができるが、その間に人生の大転回をもたらすような病的時間を挿入することはかなり困難であるように思われてならない。とすれば、もっと主体的な意志が働く状況が存在した、可能性もある。

そう考えると気になる点が一つある。それは、毛利先生が東大大学院を中退して赴任された陸軍戸山学校のことである。当時、東大から相前後して卒業生が全国の大学へ赴任したが、そのうちの少数は軍隊での活躍が期待された。その辺りの事情は軍医総監であった森鷗外の手による鷗外日記に詳しいが、同学校のことは余り触れられていない。様子が明らかになってくるのは昭和期に入ってからである。富国強兵の国家政策を背景に、同学校で毛利先生はどのような使命を担っていたのか。毛利先生の中でどのような変化が生じたのか、疑問は尽きない。

次の調査を行なうとすれば研究内容に焦点を絞り、毛利先生の留学先のハンブルグにその答えの糸口を求める必要があるかもしれない。

なお、本資料収集調査は平成4年1月から4月に実施した。調査終了後、直ちにそれらの概要を故山崎武夫会長ならびに役員会に報告した。その後6年余が経過したが、多くの同窓会員にご報告する絶好の機会と考え、齋藤和雄教授のご退官を記念して久しぶりに刊行される本誌に内容を再録した。

謝辞

本資料調査の意義をご理解くださり、種々ご支援くださった齋藤和雄教授、調査に協力してくださった関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。